

ローレンツ・フォン・シュタインをめぐる在欧外交官の動静

―伊藤博文の欧州立憲政治調査以前を中心―

栢 居 宏 枝

はじめに

本稿は、シュタイン国家学が日本にもたらされた経緯の一つとして在欧外交官に注目し、論ずるものである。

ローレンツ・フォン・シュタイン (Lorenz von Stein/一八一五・一八九〇) は、明治十五(一八八二)年三月十四日から、明治十六(一八八三)年八月四日の約一年半に及ぶ伊藤博文の欧州立憲政治調査において、最も伊藤に影響を及ぼした人物として知られている。⁽¹⁾ 伊藤の渡欧については、「憲法調査」や「立憲政体(治)調査」と呼び習わされている。⁽²⁾ しかし、伊藤が受けたシュタイン講義を見るに、その内容は「社会と国家学」に始まり、国民経済学、軍事、衛生、教育など多岐に渡り、「立憲政体(治)」や「憲法調査」に収束するものであったのであろうか、という疑問が生まれる。本稿だけではそこに十分な結論を出すには至らないが、伊藤博文渡欧以前のヨーロッパにおいて、既に在欧外交官によってシュタイン国家学が評価されていたことから、伊藤の渡欧の意義についての一考察を試みたい。

さて、日本人とシュタインとの邂逅がいつ、どのようにして、また誰によって始まったのかということについては、縷々類推はされているものの未だ明確な答えは出されていない。先行研究において早島瑛氏も、これまでも日本に來

る前にロストック大学の教授を務めていたヘルマン・ロエスラーやドイツ駐劄特命全權大使青木周蔵、ウィーン大学でシュタインに学んだ経験から伊藤博文の渡欧の際に随行員を務めた大蔵権大書記官河島醇らが挙げられてきたが、いずれも「決定的資料に欠け、所謂「状況判断」の域を出ない」と述べるに留まっている。

瀧井氏が、明治六（一八七三）年のウィーン万国博覧会に訪れていた岩倉使節団の一行とシュタインが、マックス・フォン・ガーゲルン男爵（Max von Gergern）の自宅で会っていた可能性を指摘しているが、決定的な史料の発見には至らず、論及するには至っていない。

これまでに明らかになっている中で、比較的早い時期にシュタインとの面識を持ったといえる人物は、早島氏の指摘にも挙げられている河島醇であろう。河島の伝記によれば、「ベルリンの公使館に着任した醇は一等書記生として勤務の傍、約三カ年の間ベルリン大学へ通学して、社会科学一般の研究につとめた。十一年の十一月にはロシア公使館へ転動したが、それも僅か一冬の間で、翌十二年三月にはオーストリア公使館勤務へ転じた。そして、十四年六月の帰国命令までの二年三カ月間はベルリン時代と同様に、勤務のかたわらウィーン大学へ通学、研究することを許されている。この辺の事情等や、或は七カ年にも及ぶ欧州の公使館勤務と大学通学の二重生活の消息については、殆ど資料も記録も見当たらないので、その実情はよくわからない。」とされ、その詳細については明確ではないだけに、邂逅の最初と結論付けるには十分とはいえない。

そうした中、瀧井氏は「河島の働きが主として伊藤にシュタインを紹介するところにあったと考えられるのに対して、シュタインの国家学を日本に導入するより実質的な役割を担ったのが渡邊廉吉であった。」と述べ、ウィーンの日本公使館員とシュタインの關係に着目し、奥国公使館三等書記生渡邊廉吉を取り上げている。また堀口氏は、渡邊の他、奥国駐劄特命全權大使井田讓を挙げ、井田が滞欧中の伊藤にシュタイン招聘を意見したことから、「彼も一つのラインと考えてもよいのではないか。」⁽⁸⁾としている。早島氏は「（筆者註…伊藤の）シュタイン訪問に先だってウィーン駐劄臨時時代

理公使本間清雄とシュタインの間に事前の連絡がもたれたと考えられるが、いまその間の経緯は不明のままである。⁽⁹⁾と述べ、示唆するにとどまっている。

以上のように先行研究において在欧外交官とシュタインとの関係は指摘されているものの、伊藤の欧州憲法調査がシュタインと日本人との関係構築の起点とみなされ、伊藤博文とシュタインという視角から、「誰が伊藤にシュタインを紹介したのか」という点が議論の対象となっている。つまり、伊藤がシュタインを評価し、日本への招聘やそれに代わる明治政府との雇用契約をはじめ、「シュタイン詣」を慫慂したという文脈から、誰が先にシュタインを伊藤に紹介したのか、という追及である。そこに明確な答えを見いだせない理由の一つは、既に日本人の間でシュタインが評価されている段階の中で、伊藤が渡欧し、シュタインと面会したからではないだろうか。

伊藤博文に下った詔勅には「欧洲立憲の各国に至り、其政府又は碩学の士と相接し其組織及び實際の情形に至るまで観察⁽¹⁰⁾」とあることから先行研究者の清水氏が「つくべき政府をドイツ帝国に、その学者をドイツのベルリン大学教授ルドルフ・グナイスト、オーストリアのウィーン大学教授ロレンツ・フォン・シュタインに内定していたとみることができる⁽¹¹⁾」と指摘しているように、伊藤の渡欧前からシュタインの存在は、日本人の間である程度知られた存在であったと考えられるのである。

そこで本論では、伊藤博文の憲法調査以前の欧州において、渡邊廉吉（塙国公使館三等書記生⁽¹²⁾）や井田讓（塙国駐劄特命全權大使、のち仏国駐劄特命全權大使⁽¹³⁾）、本間清雄（塙国公使館書記官⁽¹⁴⁾）、柳原前光（露国駐劄特命全權大使⁽¹⁵⁾）、青木周藏（独国駐劄特命全權大使⁽¹⁶⁾）ら在外外交官が、それぞれの視点からシュタインを評価していたこと、そして、彼ら在外外交官のネットワークの中においてもシュタインの評価が行われていたことを、渡邊廉吉のもとに届いた数々の書簡を中心に検討を行い明らかにしたい。また従来指摘されてこなかったが、シュタインが伊藤の渡欧以前の明治十四（一八八一）年十月には、塙国公使館顧問として雇用され、明治十四年十二月には既に井田讓から外務卿井上馨に宛てて、シュタイン

の日本への招入れが建議されていたことも明らかにしたいと考える。

なお、本稿に引用した史料については、復刻されているものは活字のままとし、新たにおこしたものは原文に即して、旧字体およびカタカナ、句読点を記した。また、文中の□□は不明箇所である。

一、シュタインへの注目―壙国公使館書記生 渡邊廉吉―

私見によれば、シュタインに注目し、親交を深めていたのは渡邊廉吉である。

まず初めに、壙国公使館勤務以前の渡邊の経歴から述べておきたい。渡邊は、嘉永七（一八五四）年一月、現在の新潟県長岡市で生まれ、明治四（一八七一）年十一月、大学南校独逸部に入学し翌年第一大学区第一中学で学んだ。文部省出世を経て、明治八年（一八七五）年に東京外国語学校の教諭に任ぜられた。外務省雇いは、明治十二（一八七九）年のことであった。外国貴賓渡来に付接伴掛附属となった後、明治十三（一八八〇）年三月十五日、壙国公使館の外務三等書記生に任ぜられ、同年五月二八日横浜を出発し、七月二十日にウィーンに到着した。横浜から香港までのフランス汽船では、ロシア公使として派遣される柳原前光、オーストリア公使として派遣される井田譲と同船であった。ウィーンでは公務の傍らウィーン大学へ通学し、伊藤博文が立憲政治調査の為ウィーンを訪れた際にはその通訳を務めている。その後、明治十八（一八八五）年十二月に帰国し、法制局参事官を務めている。

渡邊廉吉が最初にシュタインの事を記述したのは、明治十三（一八八〇）年十二月十七日付、妻お久^く宛の書簡¹⁸である。

（欄外）「十四年二月十六日着 第七」

十月廿九日附之御文、本月十二日到著拜見、皆々御達者之由、不堪扑舞之至候、六月卅日付之御文も慥ニ拜見致候、

其節御返事致候心得之處、御文中月日記載無之二付、逸々月日ヲ以て御返答セザル事ト存候間、以後ハ必らず月日并号トモ御記入相成度候

母様ハ至極御丈夫ニ而芝居等御遊覽之由、老後之余年なれハ折角御保養被成候事ト悦居候、信出生モ至テ壯健、定テ看護^(モリ)ニ御骨折之事ト遙察致候

洋銀騰貴、随物價益々昂貴之由、定めて御難義之事ト察し候、當地別ニ變ル事ナシ、本年ハ想之外、暖氣ニ而未夕初雪アリシノミニ御座候

私ハ不相變壯健、毎日學事ト公務ニ追ハレ消光致し居候

田邊并塩田之兩氏へハ著後早々通信致し置候間、此段御承知、右は不取敢御返事迄、草々敬白
朝比奈御父母様并お鏡様、お政様、庸吉君へよろしく御配聲偏ニ願上候

十二月十七日

廉吉

お久尔との

此程ハ大學ニ通勤シ、有名ナル大博士スタイン氏之講釋ヲ聽キ大ニ見識ヲ増し候、是ハ自慢^(ジマシ)デハナイ、眞面目^(ホンマ)デスヨこれには、日本において留守を預かる妻への近況報告とともに、この頃大學に通学し、「有名ナル」シュタインの講義を聴いて大いに見識を広めている事が書き添えられている。渡邊の通学は学籍登録を伴う正式なものではなく、あくまでもシュタインの講義の聴講の為であつた。⁽¹⁹⁾つまり、渡邊は主体的にシュタインの講義を選択し、シュタインめざしてウィーン大学へ通学していたのである。

渡邊のシュタインに対する熱心さは日を追うごとに増していたようである。年が明けて、明治十四年二月十七日付の妻お久尔宛の書簡⁽²⁰⁾では、

十二月三十一日御認之御文、今月十四日到著拜見、先々御無事之由、安心いたし候

於鋌は休業ニ而下宿之由承知、日本橋通りニ大火アレトモ御近傍ハ先々無事之由、是又案心、同月二十五日付御書は慥ニ受取、寫眞ハ随分宜敷候、暫事之間ニ大ニ成人いたし驚入候

手紙ノ上袋ハ少々誤字有之候得共、相分り慥ニ到著候間、別ニ直サズとも宜敷候

此節ハ歸朝之書付、今や到著候カ又ハ居残りニ候哉ト毎日屈指、郵船之到著ヲ待居候、何卒無事被濟度祈居候
當地ハ方今寒氣大ニ減し凌易ク相成候

夜會は過般皇室之薨去アリ、喪中トナリ一時延引ト可成候、併し又一二週間之中ニ相初り來月初旬ニ全ク終リ可申ト存候、夜會ハ必ラズ毎夜ト申譯ニ無之候へ共、一週ニ少クモ二回アリ、大抵九時半ヨリ初三字四時ニ終り候、是迄被招候處ハ宮中、各國大使館、并公使館ニ有之候へ共、尚其外許多ノ公會アリ、毎日位ニ招状ヲ受ケ候、是ハ幾許カ金ヲ出サネバナラス會ニ而甚タ迷惑至極ノ會ナリ、可成斷ラル、丈ケ斷リ臨場不致候、毎日大學へ通學、聽講勉強いたし居候、博士「スタイン」ト申人ハ六十余ノ老先生ニ而、世界屈指ノ碩學ナリ、克ク日本人ヲ愛顧サレ、休日ニハ縷々先生ノ許ニ至リ學問上ノ質問ヲいたし居候、誠ニ不可得ノ良師ヲ得、無此上幸福ト悦居候
御地も方今ハ定めて寒冷、随分御難儀之事ト察し候、嘉与之義ハ御都合次第ニ而、私より彼是不申入候得共、慥之者ニ預ケ候方如何ト勘考いたし候

歸朝カ在留カ何レノ方ニ決し候ヤ何分判然セズ、困り居候、若し兩人居残りトナレハ私ハ其一人ニ加ルベキカト存候得共、何分神ならぬ身なれハ豫メ知り得ベキニアラズ、後ノ確報ヲ得候ヘバ早速御報可申候、多分歸朝ニ決し可申ト存候、自今御用心被成度候

二月十七日

廉吉

お久尔どの

二白、何方様へもよろしく

とあり、毎日大学へ通学し勉強に励む様子とともに、世界屈指の碩学者シュタインに就いて学ぶ喜びがつづられている。六十歳あまりの老成した教授シュタインのもとを渡邊は休日を訪れ、学問について質問を行うなど、非常に熱心な様子うかがえる。また、シュタイン自身も日本人を愛顧し、両者の関係はより密なものとなっていた。

さて、『渡邊廉吉日記』には、シュタイン講義の内容を記したと推測される日記が存在する⁽²¹⁾。残念ながら、日記には具体的年月が明記されておらず、内容から、それがシュタインの講義であろうと考えられている⁽²²⁾。長いものであるが、左記に紹介する。

(年月不明)

九日

行政部ノスーステムヲ論ズ

希臘國勢ノ變換ハ民間經濟組織ノ關係ヨリ興ル事ヲ論ズ

十一日

政府ニ獨立ノ地位ト並其組織ハ官制、其意思ハ令達、其動力ハ^(クラフト)驚視ナル事ヲ論ス

希臘リクルグノ憲法並ソロンノ憲法ハ皆經濟上ノ分賦ヨリ興ル事論ス

十二日

商業ノ種類ヲ論

十四日

官吏ノ権理ヲ論ス、殊ニ其政府ニ對スル權利、及官ニ属スル權利ヲ論ス

普拉並亞立斯德的斯ノ學派ヲ論ジ、並此學派ノ生シタル原由ヲ論ス

十六日

大商小商職工人トノ區別ヲ論ス

令達、地方達、起草、草按、判決（ヘシアイド）、通知等ノ區別ヲ論ス

亜立斯德的斯ノ經濟論、並當時土地工業貨幣等ノ理ヲ知リシ事、貧富ノ別ト人間同等論ノ矛盾スル事、中等人民ハ國家ニ取り緊要ナル事、教育ナケレバ國家ヲ保チ能ハサル事、希臘ノ教育ハ一般ノ教育ナル事等ヲ論ス

十八日

商賣婦人ノ權利ヲ論ス

警察ノ事ヲ論ス

羅馬法ノ勢力ヲ論シ、并イムペリアムノ事ヲ論、附希臘ハ社會ヲ知り國家ノ理ヲ知ラズ、ポルタヤノ理ヲシルノミナリ

廿一日

前條ノ續ヲ論ス

警察ノ續並治罪手續ヲ論ス

白耳曼歴史ノ端緒ヲ論ス

廿二日

商會並商標ノ事ヲ論ス

自治ノ總論

歐洲ノ全體ヲ論ス

廿三日

商社並名称ノ事ヲ論ス

自治體ノ區別、並其來歴ヲ論ス

獨逸中古經濟ノ形況ヲ論ス

希臘理學士ノ諸説ヲ論ス

廿五日

商社讓渡ノ事ヲ論ス

國家ノ種類ヲ論ス

町村商工ノ權ヲ論ス

ソクラートスノ理學

廿六日

前條ノ續、並本店支店其他ノ事ヲ論ス

貨幣ノ起立、簿記法ノ起立、貨幣ノ比例、並テホストハンクノ起立ヲ論ス

廿八日

商賣帳記入ノ事

ランドノ自治權ヲ論ス

銀行起ル所以ヲ論ス

廿九日

商賣帳ヲ以テ訴訟上ノ証トスル事

ゲマインデノ權、並其沿革ヲ論ス

貸借商賣並手形ノ興リヲ論ス

三十日

前日ノ續

英佛獨ノケマインデノ異様、並其大政府トノ關係ヲ論ス

歐洲各國十四五六世季ノ比、終ニ經濟ヲ企圖シ初經濟ノ學生ス

二日

コルホラチオン スチフトンクノ義ヲ解ク

歐洲諸國英米ノ發見以來、世界貿易ヲ營ムノ事

ソクラトス以來ノ理學士ヲ論ス

三日

商業學派、農商學派、工業學派ノ大綱ヲ説ク、且ツ此學派歐洲ノ全體ニ關係ヲ及ス事

五日

會社ノ外人ニ對スル權、並内部主任ノ權利ヲ論ス

歐洲各國千四五六百年代ノ形況

伊國三種類ナル事

西班牙ノ富ハ權力ニ由ル事、且僕棒ヲ主トシ勞力ニ由ラサル事

普拉ノ學派ヲ論ス

六日

荷蘭ノ通商並ニ海上ノ權ヲ有スル事

漁業舟數ノ多數等ヲ論ス

九日

十日

英國千六百四五年代、政事ノ形況、並經濟ノ概況
トーマス、ミコン及ホッペルノ生ル所以ヲ論ス

十三日

商業レキステルノ事ヲ論ズ

ゲノセンシアフト ノートウエンシクカクト

ケゼルシアフト インテレッセ

フェライン カラフト

右三種ノ系統、並沿革ヲ論ス

為替券、銀行ノ貿易、航海ト共ニ起ル所以、及英國銀行ノ濫觴ヲ論ス

十四日

商業結約ノ事

ゲノセンシアフトノ事ヲ論ス

佛國ノ地勢、及千六百年代ノ有様、工業ヲ勵マス事、リシセリー、コルベルト路易十四世ノ事ヲ論ス
普拉ノ國家論ヲ論ス

十六日

前日ノ續

ケゼルシアフト、殊ニ合名会社ノ事

佛國商法律、航海律、買収法、會計法、簿記、関税、道路、橋梁、コシヒカチオン等ノ普拉ノ生活、且普拉ノ論旨ト

希臘政体ノ實際ト合スル事

十七日

商業汎例之事

佛國紙幣ノ濫觴ボシーノ事

英國銀行切手之事

十九日

クルルコント

商業帳之事

義社之事

アクションヲ準備として紙幣ヲ發行する事

普拉ノ國家各論之事

廿日

手形ノ事ヲ論ス

義社ニ三種アリ、教育、經濟及社會ニ関スル事ヲ論ス

佛國ノ紙幣大ニ價ヲ回復スル事

廿一日

前回ノ手續ヲ論ス

憲法ニ準スル政法ノシステム、並其沿革ヲ論ス

ヒスオクラーテンノ主義ヲ論ス

普拉ノ國家各論ヲ論ス

シュタインは、明治十四（一八八二）から明治十五（一八八三）年にかかる冬学期に「行政理論」を月・火・水・金曜日の午前十一時から十二時まで開講し、また、「国民経済学」を月・火・水・金・土曜日の週五日、午前十二時から午後一時まで開講していた。⁽²³⁾ 渡邊が記した講義の内容日記は、例えば最初の日付の「九日」の回を見てみると、「行政部ノスーステムヲ論ズ」と「希臘國勢ノ變換ハ民間經濟組織ノ關係ヨリ興ル事ヲ論ズ」と記されており、この年のシュタインの講義の「行政理論」と「国民経済学」と合致した内容になっている。渡邊は数回休んでいるようだが、シュタインの講義が木曜日と日曜日が休みで、土曜日に当たる日が「国民経済学」のみの講義日程から曜日を推定すると、⁽²⁴⁾ 渡邊が記した講義の内容日記は、明治十四（一八八二）年十一月九日から十二月二十一日のウィーン大学におけるシュタインの講義を記したものであると考えられるのである。また、明治十四年十一月二十五日付の妻お久宛書簡においても、

九月廿日附之御状拜見、いつも御無事之由、芽出度存候

大久保氏留守宅尋問アリ、當地之様子御聞取之由承知候

給料之義ハ先般申遣し候通り之次第付、さ様御含相成度候、今般寫眞貳葉差出候間、壹枚ハ朝比奈様へ御送呈被成度候、當地追々寒氣相増し候

御地之氣候は如何

公館も當節ハ落付、大ニ無事ニ相成り、毎日學校へ通勤聴講、日ヲ暮し居候

又冬月ニ至ルト兎角御地ハ火事多ニ付、類焼ハ不得止事なれ共、可成丈御注意御用心肝要ニ候、今年も僅ニ三十余日ヲ余セリ、回願スレハ御地出發より已ニ一年半余ヲ過セリ、即三年之半ヲ超タリ、可悦々々

右は不取敢御返事迄、草々不悉

十一月廿五日

廉吉

お久尔どの

何方様へもよろしく

と、この時期に「毎日學校へ通勤聴講」している事を報告している。渡邊の日記に残されたシュタイン講義はこの二カ月程のもののみであるが、この日記は渡邊がどのような講義を受講していたのかという事だけではなく、シュタインがウィーン大学で行っていた講義を知ることができる貴重な手がかりと言えよう。渡邊の書簡と日記から、渡邊は少なくとも明治十三（一八八〇）年の冬学期、そして明治十四（一八八一）年の冬学期にウィーン大学でシュタインの講義を受けていた。渡邊はウィーン大学へ通学してシュタインの講義を受ける中で、シュタインとの関係を深めていったと言える。さらに、「日本人ヲ愛顧」するシュタインの周りには、渡邊以外の日本人の姿も見られる。

二、シュタインの雇用と日本への招聘―塙（仏）国駐劄特命全權大使 井田讓―

シュタイン周辺の日本人には渡邊以外にどのような人物がいて、そしてまた、伊藤博文がいわゆる立憲政治調査の為に渡欧する、明治十五（一八八二）年三月以前のウィーンにおいて、シュタインと日本人との関係はどれほど深められていたであろうか。明治十三（一八八〇）年三月八日⁽²⁶⁾から翌年七月二十日⁽²⁷⁾に、渡邊とともにウィーンに渡った塙国駐劄特命全權公使井田讓は、パリへ転任⁽²⁸⁾した後の明治十四（一八八一）年十月五日、渡邊に宛てて次のように書き送っている⁽²⁹⁾。

御安康拜賀候、然ハ此度戸田氏維也納へ赴任被致候ニ付、スタイン氏へ一書差遣し度、何卒御代筆希上度候、旨意は此度赴任之戸田氏へ拙者ニ於て関様有之人物之何分別而御心添を希フ、且同氏と同行之兩人岸小三郎、鳥居誠也ハ同郷人ニして維也納府ニ於て法律研究爲致積、是亦御心添を希フとの事、並に過日拙妻へ美麗ナル贈物被下、右礼意を

述へ此度幸便ニ付、陶器額面壹箇戸田氏へ托し置候間、落手被下度、猶此度先生ニハ公使館顧問之職を奉セラレ、別而我國家之爲御盡力を願ひ且其榮譽を賀スとの邊にて宜敷願上候、參上可願上之處、所勞ヤラ大著ヤラニて乍失礼以書上得貴意候、其中拜趨萬陳謝可仕候、草々

十月五日

井田生

廉渡邊君

机下

書簡中の「戸田氏」とは、戸田氏共のことである。また、同行人の岸小三郎、鳥居誠也は戸田と同じ岐阜県大垣の出身であるが、渡欧の詳細は今のところよくわかっていない。

書簡には「猶此度先生ニハ公使館顧問之職を奉セラレ、別而我國家之爲御盡力を願ひ且其榮譽を賀スとの邊にて宜敷願上候」とあり、この頃シュタインは奥国日本公使館の顧問になつてゐることがわかる。この点について、瀧井氏の指摘では「シュタインはすでに一八八三年一〇月の時点で「我が法律制度の諮問の用に資せんこと」を請われて「在奥国公使館附とし」て日本政府に雇われている。」⁽³¹⁾とされているが、それより二年前の明治十四（一八八一）年一〇月には在奥日本公使館顧問としてシュタインは雇用されていたようである。また瀧井氏は、伊藤の渡欧以前のシュタインの立場について、「その存在（筆者注…シュタイン）はさながら公使館の非公式な顧問的立場と呼ぶべきものであったのである。」⁽³²⁾と述べているが、実際にシュタインが公使館顧問の職に就いていたことも明らかといえよう。

パリにいた井田は明治十四（一八八一）年十二月十二日書簡⁽³³⁾において、

貴地劇場之慘状、遠隔ニ在候我々ニ於ても是を聞て酸鼻ニ不堪、況や實際目撃之人ニ於てヲヤ、劇場觀物も亦可注意也、然して日本人中怪我之無之ハ大幸之至也、國會招期之勅諭千歳之一時、我朝再ヒ神武を出スト云フモ決して非誣言、讓ハ泣而以盟焉、聖意之漸を以て衆庶と之ニ由ラント欲して上ハ祖謨を被爲重、下ハ邦民ヲ被爲思候段、誰カ之

ニ對して甚遅矣と怨スル事ヲ得ンヤ、仍テ速ニ譯シテ當地二三ノ新聞ヘ掲載セリ、果シテ漸急王ノ當派ヲ不問、頗ル我邦之名決斷を賞讃、逢人ヘハ其人爲余祝詞を陳スルニ至レリ、實不妙哉、コ、ニ貴下迄漏示致シ候、如是之聖勅ニ對し、獨恐ル、處ノ者ハ現時之官制不相替議政行政之權獨重く、參元二院之權威ハ輕キノ内情も有之歟と疑懼相懷き候間、極内々余之意見井上氏迄懸反申陳置候、就而は自今中間八年ハ我々共之日月ニ候得は、此中ニコソ百度一整之際、決して因循苟且之秋ニ非スト同シク右氏迄スタイン氏招入之事申入置候、成否如何ハ雖不可推識、余輩之精神今日ニ在リテ如右、尤此儀ハ全ク貴下迄之事故、十分御秘置可被下候

スタイン氏へ手紙を書く手を不持、安否不相尋、乍去眞ニ老先生之高徳を相仰き居候と御傳可被下候、右耳草答^{マコ}

十二月十二日

讓

廉吉様

一覽後、投火ヲ乞

未タ一覽を不經候得共、英國一ノ新聞ニ而日本ノ國會猶早矣との事を申陳候事、承知致し候

と渡邊に述べ、国会開設までの約八年を「我々共之日月」として、その時期にシュタインを日本へ招聘すべきと井上馨に申し入れたことを報告している。井田が井上馨に打診したことによって、シュタインの日本への招聘がどのように動いたか、またそのこと自体をシュタインがどう受け取ったかについては明らかでないが、井田はわずか一年程の在任中にシュタインを知り、またシュタインが国会開設を控えた日本にとって必要な人物であると強く認識していた。

渡邊がシュタイン一筋にウィーン大学に通学し、シュタインとの関係を築いていたこと、それから程なくしてシュタインが塙国日本公使館顧問を務めるようになったこと、そして日本の政治状況に心を砕いていた井田がシュタインを日本へ招き入れたと考え、井上馨に打診した経緯などを鑑みるに、国会開設を間近に控えた日本にシュタイン国家学が必要であることを早くに認識していたのは、シュタインをよく知る井田讓や渡邊廉吉であつたと指摘できる。

三、シュタイン国家学の日本への伝播―露国駐劄特命全權大使 柳原前光―

シュタインを重要視していたのは井田や渡邊だけではなく。ロシアに駐在していた柳原前光もその一人である。³⁴

柳原は、シュタインが塙国公使館顧問になった直後の明治十四（一八八一）年十月十八日の渡邊宛書簡において、

益御清勝御奉務遥賀仕候、陳はスタイン氏著述書、魯文ニ翻譯セシ者穿策候處、行政法論一部既ニ刊刻相成居、入手致候、當國公法學博士マルチンス氏ハ曾テ塙京遊學之際、スタイン氏ノ講義ヲ聽聞シ、其主義ニ據リ居候旨申居候、スタイン氏學風ヲ我國ニ傳播セシムルニハ英文ニ譯スルノ便ナルニ如カス、尤同人著書ハ数多ナル故、先其内緊要ナル者而已ニテ可ナラン、之ヲマルチンスニ協議スルニ原文深奥ナレハスタイン氏ノ高弟ニ非レハ難カラント云ヘリ、スタイン氏其地ニ歸ラレ候得ハ誠ニ此義御示談有之度、尤其譯者ヘノ謝礼如何程ニテ可然哉、入費相嵩ミ候テハ困窮候故、是又御注意御計致企望候、普國人グナイスト著述之英國憲法論及自己ノ政府ト題セル書ハ英文ノ者有之由ニテ穿索致居候、曾テ御約束致置候拙者寫眞、先般差進候得共、途中ニテ紛失候哉ト懸念候義有之候故、爲念本便尚一葉進呈候、御晒収可被下候、不盡頓首

十月十八日

魯京書

渡邊廉吉殿

柳原前光

机右

と書き送っている。書簡中柳原は、シュタインの著書のロシア語に訳したものを探し、行政法論の一部が既に刊行されていたため入手したこと、ロシアの公法学博士のマルチンス氏という、かつてウィーン遊学を行った際にシュタインの講義

を聴講しその主義に傾倒した人物がいること、シュタインの学風を日本に伝えるには著書を英語に訳したものが都合がよいが、シュタインの著書は数が多いため、その中でも重要性が高いもののみ訳すこと、そしてそのことをマルチンスに協議したところ、原文は深奥である故にシュタインの学説をよく理解した高弟でなければ英訳するのは難しいと言われたことを報告し、シュタインがウィーンに帰った際にこの英訳の件について相談してほしいと依頼している。柳原はシュタインの学風を日本に広めるべく、その主要な著書をまず英語に翻訳することが重要と考え、渡邊の協力を仰いだ。

続く十二月十一日の渡邊宛柳原書簡では、左記のように述べられている。³⁶⁾

十一月廿八日書翰、本月八日於當地接收、弥御多祥查賀致候、○各国憲法ハ不遠帰魯之後、送致可仕候、○スタイン氏著書英文ニ翻譯可相成趣得來示、甚心得ニ相成候、御序之際、其翻譯ニ從事スル人名御尋問御報知相願度候、○スタイン氏ノ名刺ニテ魯國大學教授ベソブラサフ氏ニ當タル者、正ニ致接收、萬謝之至ニ候、帰魯之後、之ヲ以テベソブラサフ氏ヲ必尋問可致候、憲法及行政論御著手之由、何卒脱稿候得者拜見相願度候、既ニ我邦ニテモ大隈重信國會急設ノ議ヲ建テ辭職候得共、其餘波遂ニ來廿三年國會開設ノ勅詔公發ニ相成候、政事上ヨリ論スレハ十年ハ短キ者ニテ即チ明年一月モ廿日以内ナレハ今早九年ト称スヘシ、旁以十分御盡力、我東洋ニ於テ初メテ立憲政体ヲ確定スルニ方リ萬全之者不被行テハ難叶、旁以爲公私非常御勉勵企望候、先ハ拜復旁如此候、頓首

十四年十二月十一日

瑞典國都書

渡邊廉吉殿

柳原前光

この書簡からは、シュタインの学風を日本に広めるべく、シュタイン著書の英訳がいよいよ実行される様子をうかがうことができる。柳原がシュタインの著書をもってシュタインの学風を日本に広める必要性を感じた最も大きな理由の一つに、九年後に差し迫った国会開設と立憲政体導入という、日本の政治状況があった。換言すれば、近代日本が置かれてい

た国家建設という重要な局面において、在欧外交官らによってシュタインの学説が注視され、日本に取り入れるべく尽力されていたのである。

柳原は渡邊を通してシュタインに貴族院などの質問を仰ぐこともあった。⁽³⁷⁾

本月九日貴諭接收、益御清祥致杳賀候、春來歐洲ノ景況、得貴報萬謝候、前光去月念七瑞京出發、那威丁抹ヲ經過シ、頃日歸魯仕候、本邦近況は官海ノ波瀾治ラス、大隈、河野、前島、西村、北畠等ノ勅任官ヲ首トシ、此派ノ者、福澤派ノ者、悉ク官途ヲ去リ、大藏ノ一省ニテ二百數十人ニ及候、要路ハ薩長人耳ニテ組織スル如キ実況ト存候、又或參議ノ發論ニテ貴族議院ノ企テ有之由、我華族ハ歐洲貴族ノ如ク土地ヲ有セス、又智識ナシ、然ルニ純乎タル華族議院ヲ立テ元老院ヲ廢スルハ甚不妙、蓋シ盛シナレハ王權ヲ假テ私ヲ行ヒ、衰フル時ハ委靡不振ノ弊多シ、既ニ元老院アリテ華族モ其間ニ入ルハ無不可候得共、專有一族ノ議院ハ不可ト存候、所詮或參議ノ說實行ニハナル間敷存候得共、貴族專有之議院其利害御序ノ際、スタイン氏ニ御質訊御報告企望候、英ノ上院ハ貴族院ノ称首ナリ、然レトモ王權ヲ以テ巧臣ヲ貴族ニ加ヘ入院セシムル故、其實元老ノ性質ヲ免レス、拙者ハ上院ハ元老院ヲ可トシ、皇族、華族、經歷者、學者等ヲ以テ組織スル事ヲ可トスル説也、

各國憲法一冊如兼約及御送付候、御照爲企望候、尚御用濟候ヘハ御返却相願候、拜復旁不盡

十五年二月十四日

渡邊廉吉殿

柳原前光

この書簡の前半で柳原は「本邦近況は官海ノ波瀾治ラス、大隈、河野、前島、西村、北畠等ノ勅任官ヲ首トシ、此派ノ者、福澤派ノ者、悉ク官途ヲ去リ」と渡邊に近況を伝えている。その渦中にあつた福沢諭吉に対してシュタインは、明治十五（一八八二）年三月下旬、左記の書簡を送っている。⁽³⁸⁾

余ハ足下ノ公法時事ニ関スル著書ノ甚タ簡短ナル抄訳ヲ、日本毎週メール新聞ニ於テ一読セリ。斯ル日本政体改良ノ

為メニ大切ナル著書ノ全文カ、或ハ其重ナル部分ノミニテモ、欧州中何レノ国語ニカ翻訳スルヲ得バ、政体学一般ノ為メノミナラス、広ク日本国ノ名声ヲ世界ニ発揚スルニ大切ナルハ、余カ信スル所ナリ。余ガ敬愛スル朋友、前キノ維納府在留日本公使井田讓君及ヒ書記官本間清雄君、余ノ書翰ヲ足下ニ送致スルノ厚情ヲ辱フセシヲ以テ、敢テ一書ヲ呈ス。余ハ此頃日本法律ノ歴史及ヒ其政体研究ニ従事セリ。若シ日本人民ノ声誉ヲ伝播スルノ一助タラバ、余ガ悦何ソ之ニ如シ。蓋シ日本人民ノ近頃十七年間非常ニ進歩シ、且ツ後來太平洋ノ一大開明国タルベキハ、各人ノ許シテ以テ尊敬セサルヲ得サル所ナリ。余ハ塙地利科学校ノ社員ナレハ、余輩近刻ノ一書ヲ呈ス。余カ社員ノ眼ヲ日本歴史ニ注クノ深切ナルハ、此書ヲ一覽アリテモ知ラルヘシ。願クハ足下此著書ト余ガ書翰ヲ受納シテ、余カ足下ヲ尊敬シ又貴著ノ詳細ヲ知ラント欲スルノ一証トナサバ感謝ニ堪ヘス。頓首。

塙地利維納府大学校政治学教授 博士ローレンズ、フォン、スタイン

日本 福沢君

これは、明治十四（一八八二）年十一月二十六日から明治十五（一八八二）年一月二十一日までの七回に渡って、『Japan Weekly Mail』に掲載された、福沢諭吉の『時事小言』に接したシュタインの書簡である。⁽³⁹⁾ 福沢はこれに対する返事を、明治十六年六月三日付で英文にて送っているが、シュタインと福沢の往復書簡はこの一度限りである。

シュタインの書簡を日本語に訳し、福沢へ送ることを可能にしたのは、やはり「余ガ敬愛スル朋友、前キノ維納府在留日本公使井田讓君及ヒ書記官本間清雄君」の存在であった。次節では、井田讓と塙国公使館書記官の本間清雄⁽⁴¹⁾について考察したい。

四、伊藤博文の渡欧とシュタイン面会をめぐる在欧外交官

既に知られているように、伊藤の立憲政治調査は明治十五（一八八二）年一月十五日の閣議にて、元老院議長であった寺島宗則が、「従来元老院を始め大臣、参議等交々憲法制定に就き講究を重ねたるに拘らず、孰れも満足なる成案を得ざる事情に顧み、先づ伊藤参議を歐洲に派遣し、憲法の原理と実際の運用とを調査せしめ、その結果に基き日本獨特の憲法を欽定し給ふべし。」と發議を行つたことに始まる。そこで、三條、岩倉をはじめ参議一同賛成し、伊藤を一年間歐洲に派遣する旨、天皇に奏請することが決定した。同年二月三日には、伊藤が三池炭鉱視察から帰京した。同月二十七日、歐洲各国における憲法制度の組織及び運用を調査すべき旨の沙汰が下された。そして、出發が間近に迫つた三月三日に、伊藤に下された勅書によれば、その目的は、「歐洲立憲の各国に至り、其政府又は碩学の士と相接し其組織及び實際の情形に至るまで觀察」⁽⁴²⁾することであつた。

さて、伊藤の歐洲立憲政治調査は、歐洲の公使館員にどのように受け止められたのであろうか。明治十五年四月十一日付、渡邊廉吉宛井田讓書簡⁽⁴³⁾では、左記のように述べられている。

御安寧可賀、御示之如く其御地追々寂寥と相成候由、乍去御勉強之爲にハ至極之閑天地と被存候、當處ハ誠ニ本朝人之出入多にて月々数名を不下、太甚敷雜沓ニ候、公用も亦随フテ多事、困却此事ニ御座候、當年ハ始終旅行耳、漸昨今引取申候、兼而之書物隔々披見致試候得共、何分御對談に無之テハ手之付ケ様も無之、遂ニ等閑打過き申候、定而追々之御積學にて今日にては御面會を得候得は、別而余ニ益する處あらんと相樂居申候、伊藤参議歐洲へ出張、即今航海中、今月末には着巴と存候、書記官七名許随行と申事故、河島も其一系列ニ必ス加入と存候、誠ニ大慶也、先日河島より種々書類差送申候、中々氣張居申候、尤勉強と申事也、参議之出歐は政事上之視察ならんと各々勘考罷在候、夫迄ニハ別而貴兄等御骨折被成置度、同公は必然須師へ出會を相樂居申候、有栖川之大使も定而實説ならん、乍去是

は風聞のミに而確實ならず、板垣之件は何共意外、如斯暴人之顯出ニハ困入候、却而我黨正義を吐出スルノ妨害と相成、痛心罷在候、西白兩國は随分未開也、乍去白人種故、歐洲視せられ居候ハ残念也、可學之件は一二條之外不見當候、バルソロン又通行懸同處人民之動搖ニ出逢、辻々ガルバルデーノ畫像を掲ケ居、軍人政事を以て漸く壓縮際中ニ而有之、其後ハ定而鎮静と相考申候、其中御面會之後、猶追々愚考之件、且ハ貴兄學ひ得タル妙説を相互ニ吐露いたし度と存候、日々新聞は遂ニ我黨之宗ニ入レリ、乍去俄カニ獨逸を吐出スハ失策ニして其正理上より説出ス事を我輩欲スルナリ、貴兄如何と思フ哉、日本中黨派とか何とか相唱候中ニも随分筋立候説を吐く者追々見受申候、當處ハハ報知新聞、又ハ朝野新聞等も參リ、時々披見、心目を相慰申候、小生マドリットに於て咯血相催、一時は大恐縮罷在候處、其後漸々全快、不相變頑健也、御安心可披下候、當公使館無事、家族亦同様也、小兒等は大分佛語も出来出し申候、而して平素兩人ハ相互ニ獨語にて遊戲罷在、追々日本語を失念候様子、又々家妻懷妊、來月頃ハ出産之様子困却いたし候、昨日鍋島着巴ニ而中野丹羽等も來巴、賑々敷事ニ而御坐候、追而近傍ナル大公園春色相催し、毎朝二時間ツ、試歩いたし、健康を相保居、今後御面晤之際は一層元氣相発可申と存候、本間へ宜敷御通辭被下度、先右耳、草々

四月十一日

讓

廉吉賢兄

「須師」とはシュタインの事である。井田は渡邊に、伊藤が欧州に向けて航海中であり、その随行員の中に河島醇も含まれてゐること等を述べ、シュタインとの面会を楽しみにしている伊藤の様子を伝えている。

伊藤がシュタインに面会することは、欧州到着以前から既に決定していたのである。それが、柳原前光がシュタインの著書を日本に広めるべく尽力した結果であるのか、もしくは一時帰国していた河島醇の勧めであったのか等については明確ではないが、在欧外交官の間で既にシュタイン国家学の重要性が認識されていたことや、シュタインが在澳日本公使館

顧問を務めていたことを考えてみても、伊藤はシュタインに会うことを目的に渡欧したとしても不思議はない。

また、「日々新聞は遂ニ我黨之宗ニ入レリ、乍去俄カニ獨逸を持出スハ失策」とドイツを前面に押し出す政策に対し、井田は懐疑的である。そして「其正理上より説出ス事」を求めている。

伊藤らは、明治十五（一八八二）年五月五日ナポリに上陸し、五月十六日にベルリンへ到着した。ベルリンで伊藤と合流する予定の柳原は渡邊に、

本月廿一日貴東、本日接收、益御清祥杳賀致候、伊藤參議ニハ全ク憲法取調ニ関シ國會準備之爲ト考へ候、其随員中西園寺君ハ帝室ニ関スル事件取調被命、前光ニも協議尽力可致旨、宮内卿より勅旨被相達候、就テハ今後憲法ニ關係シ貴下御補助ヲ乞ヒ候事も可有之折柄、來書ヲ得、甚以満足仕候、伊藤、西園寺等より頻ニ書面差越、速ニ面會致度申越候故、明日當地出發、伯林へ罷越、面晤之積ニ候、尚貴下憲法事件御盡力可相成義は公私之幸故、伊藤氏へも其段申聽置可申候、前光ハ兩三日伯林滞在、夫より瑞典へ渡り來六月六日銀婚ノ祝典ニ參會シ候目的ニ候、○左大臣宮、魯帝即位ニ參會ノ爲メ御出使可相成候、右は魯帝即位之期未確定ナレトモ、多分八月末九月初メニ可有之故、豫シメ早メニ本邦御出發ト存候、弥然ル時ハ瑞典より直チニ佛國へ出張、同所ニテ御出迎致シ候積ニ候得共、本邦より一電報到來不致候間ハ其邊未定ニ候、○本間氏へ御無沙汰致シ可然御通聲企望候、○明日出發ニ付、大ニ取込、亂書御判察企望候、頓首

十五年五月廿四日

魯都

柳原前光

渡邊廉吉殿

と送っている。⁽⁴⁵⁾柳原は渡邊に、「貴下憲法事件御盡力可相成義は公私之幸故、伊藤氏へも其段申聽置可申候」と渡邊を伊藤に紹介する事約束した。⁽⁴⁶⁾柳原が、渡邊を伊藤に紹介する理由には、渡邊の知識に加え、シュタインとのパイプを有して

いたことが挙げられるであろう。

その後、ベルリンで伊藤と再会した柳原は、

益御清祥查賀候、陳は前光先頃來、瑞典ニ罷越候處、本日出發、伯林へ罷越、伊藤參議ニ再會、凡來月中滞在、其間
李國憲法類研究之積ニ候、就テハ先頃借進候各國憲法入用御坐候間、別紙通り前光寓所へ當テ右書冊御差返シ企望
候、將又貴下憲法ニ御注意之義ハ先月下旬伊藤へ面會候際、及陳述置候、同氏其地へ罷越候節は彼是足下へ御依頼可
及景況ニ候、將又本邦新憲法制定ノ爲メ驚力候ニ付、參考トナルヘキ書籍ニ付、貴下高考又ハスタイン氏議論有之候
得は書目獨逸文ニテ御認被下、前述伯林拙者寓居へ御報知被下度候、左大臣宮ハ弥本月十八日本邦御出發、隨行ハ宮
内大書記官外ニ林、西徳次郎、山本陸軍少佐、加藤増雄等之趣ニ候、弥御入魯之時ハ伊藤參議、西園寺も伯林より隨
行之筈ニ候、本間氏へ及無音候間、可然御傳聲且右事件も御致聲企望候、但魯廷内務卿更替、廟堂混雜等ニて即位之
期未判然ニ候、乍併宮ハ豫シメ本邦御出發、寛々歐洲景況御視察被遊候目算ト存候、草々不盡

十五年六月廿六日

瑞典國都

柳原前光

渡邊廉吉君

机下

と渡邊に報告⁽⁴⁷⁾している。柳原によれば、「將又貴下憲法ニ御注意之義ハ先月下旬伊藤へ面會候際、及陳述置候、同氏其地
へ罷越候節は彼是足下へ御依頼可及景況ニ候、將又本邦新憲法制定ノ爲メ驚力候ニ付、參考トナルヘキ書籍ニ付、貴下高
考又ハスタイン氏議論有之候得は書目獨逸文ニテ御認被下」と、シュタイン講義に際して渡邊の存在は非常に重要であ
り、その渡邊に柳原はシュタイン講義へ向けての支度を指示した。

明治十五年七月五日付、井上馨宛伊藤博文書簡によれば、「グナイス師も来八月初旬ヨリ入浴之筈ニ御座候故、事宜ニ寄り同時より澳国ニ赴キ、彼国之有名ナルスタイン師ヲ訪ヒ其説ヲ承リ度企望罷在候。同師ハ炎暑中其所有地ニ在ル山間ノ湯治場ニ游蕩スルトノ事ニ付、其地ニ就テ学ヒ候積ニ御坐候⁽⁴⁸⁾」と述べられている。伊藤がシュタインの元を訪れたのは、八月八日であった。その場所となった「其所有地ニ在ル山間ノ湯治場」とは、現スロベニアのLaskoにあるシュタインが所有していた保養所のことである。⁽⁴⁹⁾シュタインはウィーン郊外のWeidlingauへ、現スロベニアのLaskoの二か所に別荘を持っていたが、その内湯治ができる保養所にあたるのは、Laskoの別荘である。

ついに、伊藤がシュタインに会うことを知ったバリ在勤の井田譲は、澳国日本公使館の本間清雄書記官に宛てて次のように送った。⁽⁵⁰⁾

伊藤参議ニも石先生へ面會相成候趣実ニ面白き論議も有之たる事と想像ニ不堪候、此挙にして参議来欧之鴻益之最なる儀と相考候、小生等之所遇ハ独石先生之好論のみならず澳国政事上ニ於て且ハ風俗上ニ就而参議之十分ニ洞察有之事を冀望罷在候也、河島氏も定而満足ニ周旋可被致、右宜敷御伝可被下候

有栖川宮殿下ニハ羅馬より直ニ御出巴可相成と曾而承达居候處、今以御途次之御模様不申如何之事ニ御坐候哉、或ハ貴論之如く先ツ澳国へ向ケ御発途相成事ニも候哉

當国政府又々又々更迭其以変、其名之如く一般昨今新設之政府ハ海水浴之政府と既に已ニ異名を被附候、其次外々夏休暇代議士等海水浴中ハ安泰無事□□と議場相開ケ候時ハ忽チ墮落と申事ニ而我輩之深く戒メテ切ニ恐ル、所以も亦不外之也

佛国政府ハ埃及事件果敢敷カラス御地之評判被聴や被成下度候先両君へ御答迄草々頓首

八月十二日夜

本間
渡部^{マツ} 両君

本年當地之夏ナリ

現今余程秋氣ヲ催セリ

前出の明治十五年四月十一日付、渡邊廉吉宛井田讓書簡同様に、井田はシュタインと伊藤が面会し、そこで交わされる論議が日本の立憲政治樹立に向けた一歩となることに大いなる期待を寄せた。

シュタインと伊藤が面会することは、独国駐劄特命全權公使青木周蔵にも伝わっていた。明治十五年八月十一日付伊藤博文宛青木周蔵書簡では、「於錦地碩学「スタイン」氏へ御面晤相成候由、恐悦々々。氏は会計学之区域に於而も有名之人物に御坐候間、彼是討論御試被成度候。小生も高論に従ひ、都合次第御地へ出掛、氏と一会仕度存念に御坐候。」とあり、会計学にも精通するシュタインとの討議に多いに関心が寄せられている。同日、伊藤は日本にいる岩倉に宛てて「独逸にて有名なるグナイスト、スタインの両師に就き、国家組織の大体を了解する事を得て、皇室の基礎を固定し、大権を不墜の大眼目は充分相立候間、追て御報道可申上候。実に英、米、仏の自由過激論者の著述而已を金科玉條の如く誤信し、殆んど国家を傾けんとするの勢は、今日我国の現情に御座候へ共、之を挽回するの道理と手段とを得候。我国の赤心を貫徹するの時機に於て、其功駿を現はすの大切な要具と奉存候て、心私に死処を得るの心地仕候。」と報告した。伊藤はシュタインとの討議から得た知識をもとに、帰国の後、立憲制確立に向けて政治的主導権を掌握できるとの確信を得たのである。

伊藤は八月八日にシュタインと面会した後、一旦ベルリンへ戻り、九月半ば再びシュタインの元を訪れシュタイン講義が始められた。シュタイン講義が始まる前の、明治十五年八月十九日付伊藤博文宛井田讓書簡では次のように述べられている。

芳翰拝収。益御安泰為邦家御尽力被為在奉大賀候。然は柏林府へ永々御滞在国家学御研究被為在に付悚々然、果し而

本邦流言之通専ら独逸政体に被偏国法御編製可相成歟と窃に痛心罷在候処、石先生へ御面会相成豁然邦家之理御通会相成候との旨、我々等に於て始而我邦幸福之大運自今可見と雀踊之外無御坐候。実に石先生は我家之師、昨冬御変革之際外務卿井上公へ是非御微聘相成国家之組織を御相談有御坐度と迄申上候事に而、果此人にして本邦之聘に應するや、将来之書生に方向を授け遂に我朝特種之国家学基礎とも相成、加るに現今真向きに可然之自由を唱る学者輩をして其胆を寒からしめは、邦家之大益之に過る者無之候。不遠御面会も可相叶付不取敢高論に酬、人情縷陳相見合、唯々邦家始靖矣之一語を呈し、閣下之石先生に御面会相成候事を奉大賀候。

有栖川宮殿下今晚御着巴、此段為御心得申上置候。スツルペー氏に昨日も面会、魯帝即位之有無問合候得共、何共答弁致し兼候旨にて迷惑相頭申候。此儀も併せて申上置候。

八月十九日

井田讓頓首謹言

伊藤参議閣下

「石先生」とは、シュタインの事である。⁽⁵⁴⁾井田は、「然は伯林府へ永々御滞在国家学御研究被為在に付悚々然、果し而本邦流言之通専ら独逸政体に被偏国法御編製可相成歟と窃に痛心罷在候処」と述べ、ドイツ政体一辺倒になることに反対の意を唱えた。そして、「石先生へ御面会相成豁然邦家之理御通会相成候との旨、我々等に於て始而我邦幸福之大運自今可見と雀踊之外無御坐候。実に石先生は我家之師、昨冬御変革之際外務卿井上公へ是非御微聘相成国家之組織を御相談有御坐度と迄申上候事に而、果此人にして本邦之聘に應するや、将来之書生に方向を授け遂に我朝特種之国家学基礎とも相成、加るに現今真向きに可然之自由を唱る学者輩をして其胆を寒からしめは、邦家之大益之に過る者無之候。」と述べ、シュタインを日本へ招聘しようと井上馨に上申したことに触れ、シュタインこそが国家学の基礎であり、日本の国家組織に有益であることを強調している。坂本一登氏によって、伊藤は書簡を通じて岩倉らへ憲法調査の成果と意義を強調し、「ま

さに絵に書いたようなドイツ主義者を演じて」⁽⁵⁵⁾ いたことが指摘されているが、井田の書簡はそのような過度にドイツに心酔する伊藤に、シュタインの学説をもつて英国型立憲政体派に対抗すべきことを求めている。

井田の書簡から一週間後の八月二十六日、伊藤は外務卿井上馨にシュタイン招聘の必要性を建議した。明治十五年十月二十四日付で山県有朋から三条実美に上申された「澳国学士スタイン氏備入結約ヲ伊藤参議ニ委任并同氏年金給与ノ件」⁽⁵⁶⁾には、その時の書簡の写しがあり、左記に引用したい。

澳國ノ學士スタインニ面會候處、博學卓見、議論正大、其歸着スル所、邦國ハ君主國ニ如カズ、君主ハ君權完全ニ如カズ君主は憲法ノ上ニ位シ、行政府ハ立法ト並立スヘキ者ニシテ、宰相ハ決シテ代議院ノ臣僕ニ非ス國家萬機を料理判定スルハ宰相ノ責任ナリトノ道理ヲ證明シ歐洲諸國ノ政體多クハ君主國ニシテ協和主義ヲ含蓄スルノ非ナルヲ論破セリ而シテ日本ノ形勢ニ付テ必用トシテ論スル所ハ大學校ノ基礎ヲ定メ學問ノ方嚮ヲ正スニ在トノ主意ナリ若シ我政府ニ於テ此師ヲ迎ヘ學問上ノ組織ヲ依托スルヲ得ハ實ニ萬世ノ幸福、皇室ノ為ニハ、千萬ノ忠臣ヲ得ルモ亦易ニ耳即今維納府大學ノ校長ニシテ邦國學、政治學、經濟學、社會學等歐洲諸學士ノ推尊スル所ナリ今我國ニテツマラス洋人ヲ多人数備役セル給料ヲ轉シテ如斯人物ニ取換度モノト頻ニ希望仕候何卒廳坐諸公ノ御計畫御意見御示被下度候英米佛ノ民權協和自由論ヲ破却スルハ此人ヲ除キテ他ニ銳利ノ靈劍無之ト確信仕候

伊藤はシュタインの人格を「博學卓見、議論正大」と評価し、「我政府ニ於テ此師ヲ迎ヘ學問上ノ組織ヲ依托スルヲ得ハ實ニ萬世ノ幸福、皇室ノ為ニハ、千萬ノ忠臣ヲ得ルモ亦易ニ耳」と絶賛している。伊藤がシュタインと面会したことによつて得られた「道理と手段」⁽⁵⁷⁾とは、シュタインの口勿から得られるシュタイン国家学そのものであった。伊藤はウィーン大学教授であつたシュタインを、「維納府大學ノ校長」と誇張して伝えている。伊藤は、シュタインを評価した点の一つとして、「英米仏ノ民權協和自由論ヲ破却スルハ此人ヲ除キテ他ニ銳利ノ靈劍無之ト確信仕候」と述べているが、それはまさに前述の八月十九日付井田書簡における意見と一致していると言えよう。

伊藤は十月三十一日までシュタインの講義を受け、十一月五日にウィーンを離れた。その後シュタインは老齢であることなどを理由に來日を謝絶した。⁽⁵⁹⁾シュタインの日本への招聘、次いでシュタインが塙国日本公使館附として日本政府との間に雇傭關係を結んだことについては、堀口修氏の研究に詳しい。⁽⁶⁰⁾シュタインの日本への招聘が叶わないと知った井田の落胆は大きかった。明治十六年一月十九日付渡邊廉吉宛井田讀書簡では、

此中スタイン先生より一書を得申候、併せて寫眞壹葉被相投候、宜シク余二代、禮辭御陳し可被下候、余等之寫眞ハ近日相調へ可差贈と御申傳へ可被下候、其書信之文字ニ據レハ永ク東西を隔ツト雖モ、如相見之爲と有之候、果して先生ハ我邦ニ來遊不致事と誠ニ遺憾千萬、自今我邦ニ確立スル處ノ學統ハ何人ニ頼りて相立可申歟、實ニ足下等ハ益勉勵、翁之眞意之所在之傳統を誤ル勿レ、河島も在維之由宜敷御傳可被下候、小生ハ不遠歸朝可致、未ダ日時ハ不定、其中御報可及、何なり共御留守宅へ御用向可被仰聞候、必ス足下ニも自今一年を不出歸朝被成、余等ニ有所教レハ幸甚之至也、當地カンベツタ氏死亡後、人々悸怖果シテナホレオン氏ノ激文を見タリ、言論自由之郷ハ名ハ美と雖モ、政權ハ果シテ何地ニ在ルヲ不知、本日ノデバ新聞之論ハ實ニ得我志矣、先右丈御無沙汰之御理として表寸意候

一月十九日

讓拜

廉吉様

公館諸君へ宜しく相願候

と述べられ、井田は「先生ハ我邦ニ來遊不致事と誠ニ遺憾千萬、自今我邦ニ確立スル處ノ學統ハ何人ニ頼りて相立可申歟、實ニ足下等ハ益勉勵、翁之眞意之所在之傳統を誤ル勿レ」と、シュタインの日本招聘が叶わなかったことへの落胆を示しながらも、引き続きシュタイン国家学を日本へ伝える意志を示している。

そして、渡邊ら塙国外交官のシュタインとの折衝は、伊藤の帰国後さらに重要となった。いわゆる「シュタイン詣」が始まったからである。

シュタインは伊藤に対して、来日できないことへの代替として、「猶ほ余は傍らに當府留學の貴國青年書生を幫助し、獨り彼輩の爲めに、大學入門の周旋を爲すに止らず、余が一身の學友として彼輩の學事を勸奨すべし。是に於て乎余は自ら日本書生の歐洲の學科を修むるもの、爲に、一個の中點となりて他日貴國に大學を作興するの元資を生ずるの媒介者たらんとす。夫れ智識の發達を謀るは、大學を興すに若くはなし。若し貴國にして大學校の教育を振作せば、則ち其洪益は自ら東洋諸國に波及するに至らん事必せり。余此の志を懷く事既に久し。唯だ未だ之を實際に試みざるのみ。」と提案した。そして、シュタインは塙國公使館附で日本政府に雇われ、「シュタイン詣」が始まるのである。⁽⁶³⁾

「シュタイン詣」やシュタイン講義については、別稿で論ずる予定であるが、そうした「シュタイン詣」に訪れる日本とシュタインとを仲介していたのも、塙國外交官であつた。その端緒となつた事例を紹介しておきたい。左記の書簡は、⁽⁶⁴⁾柳原前光が渡邊に宛てて、本願寺の僧侶北畠道龍⁽⁶⁵⁾とシュタインとの面会を取り計らうよう申し入れた書簡である。

益御清祥致慶賀候、陳は今般本願寺僧北畠道龍其地へ罷越、宗教上之儀及取調、又スタイン氏ニ面會、政教之關係權衡等質問候見込ニ有之、此人ハ六十ノ老齡ニテ特志海外ニ來航、和漢ノ博識ハ勿論、獨逸書ヲモ解得候、何卒老兄ニ於テ右スタイン氏へ會晤質議^(マ)之事成就候様、御周旋懇望候、將又拙者儀ハ如素願御用帰朝被命候故、本月三日魯帝へ告別謁見相濟、頗丁重ノ隆遇ヲ得、愈本日出發、瑞典へ罷越、六月ニハ帰朝之積ニ有之候、尚本邦ニ於テ可得拜芝屈指相樂居候、不盡

十六年三月八日

前光

渡邊廉吉殿

魯都

このようにして、シュタインをめぐる在欧外交官のネットワークは、特に伊藤の滞欧中に發揮されたのである。それには、伊藤の渡欧前からのシュタイン評価が前提となつていたと言えるであろう。

おわりに

渡邊廉吉は奥国公使館勤務の傍ら、ウィーン大学でシュタインの講義を聴講し、個人的にも良好な関係を築いていた。渡邊がウィーン大学教授および奥国公使館顧問となったシュタインをどのように評価していたかについては明確ではないが、井田讓と共有するところは大きかったに違いない。

井田讓が仏国駐劄特命全權大使となり多忙を極める中においても、渡邊に日本の政治状況や伊藤の渡欧について書き送っていたことは、井田のシュタインに対する評価や期待がとても大きかったことを印象づける。渡邊と違い、井田は特命全權公使という立場から、シュタインを日本に招聘すべく、井上馨に上申するなどその活動は活発であった。⁽⁶⁶⁾ それらの行動は、伊藤に「果此人にして本邦之聘に応ずるや、将来之書生に方向を授け遂に我朝特種之国家学基礎とも相成⁽⁶⁷⁾」と書き送っていることからわかるように、日本の方向性を見据えたものであった。

一方、露国駐劄特命全權公使の柳原前光は、「既ニ我邦ニテモ大隈重信國會急設ノ議ヲ建テ辭職候得共、其餘波遂ニ來廿三年國會開設ノ勅詔公發ニ相成候、政事上ヨリ論スレハ十年ハ短キ者ニテ即チ明年一月モ廿日以内ナレハ今早九年卜称スヘシ、旁以十分御盡力、我東洋ニ於テ初メテ立憲政体ヲ確定スルニ方リ萬全之者不被行テハ難叶⁽⁶⁸⁾」と述べ、日本の国会開設を巡る政治状況に危機を感じたことから、「スタイン氏學風ヲ我國ニ傳播セシムル⁽⁶⁹⁾」ことを企図していた。柳原は貴族院の処遇についてシュタインに質問を仰ぎ、また伊藤の渡欧に際して「隨員中西園寺君ハ帝室ニ関スル事件取調被命、前光ニモ協議尽力可致旨、宮内卿より勅旨被相達候⁽⁷⁰⁾」と帝室制度取調に尽力し始めた状況も相まって、シュタイン国家学を評価していたと言える。

また、独国駐劄特命全權公使の青木周蔵は「於錦地碩学「スタイン」氏へ御面晤相成候由、恐悦々々。氏は會計学之区域に於而も有名之人物に御坐候間、彼是討論御試被成度候。小生も高論に従ひ、都合次第御地へ出掛、氏と一会仕度存念

に御坐候。」とシュタインが会計学に精通している事を評価し、伊藤に伝えていた。

以上のように、シュタインは在欧外交官の間で評価され、伊藤の渡欧以前にすでに奥国公使館顧問としての雇用や、シュタインの日本招聘に向けた動きがあった。すなわち、伊藤の渡欧以前にシュタインの学風については、在欧外交官を通じて日本に伝えられていたのであり、伊藤はかなりの予備知識を持ってシュタインの講義に臨んでいたといえよう。実際に伊藤に対して行われた講義の内容が、憲法そのものについてというよりは、シュタイン国家学そのものであったのも、伊藤とシュタインの面会が周到に準備されていた証左であると指摘できる。そしてまた、伊藤が欧州に來たことによってシュタイン国家学を日本への伝播する機運が高まり、急速に高まりをみせたシュタイン熱とシュタイン詣を実現させたのも、彼ら在欧外交官であった。

註

(1) 瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制―シュタイン国家学の軌跡―』(ミネルヴァ書房、一九九九)、同『文明史の中の明治憲法―この国のかたちと西洋体験―』(講談社、二〇〇三)を参照。

(2) 伊藤博文の欧州立憲政治調査については、清水伸『明治憲法制定史(上)―独逸における伊藤博文の憲法調査―』(原書房、一九七四)、稲田正次『明治憲法成立史』(上下、有斐閣出版、一九六〇)などの憲法制定史の中で既に詳しく述べられている。坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』(吉川弘文館、一九九二)では、伊藤は欧州において、行政の実態や現実の政治が執られている現場に立ち

会うことでその理解を深め、帰国後日本での立憲制を導入やその運営に際して、「立憲のカリスマ」として自己の政治的威信の源泉にしたことが論じられている。また近年、島海靖『伊藤博文の立憲政治調査』(島海靖、三谷博、西川誠、矢野信幸編『日本立憲政治の形成と変質』、吉川弘文館、二〇〇五)では新出の書簡を含め新たに渡欧中の伊藤の書簡が整理され、伊藤の欧州立憲政治調査の様相がさらに明らかにされた。

(3) 伊東巳代治筆記「大博士ス丁氏講義筆記」(清水伸『明治憲法制定史(上)―独逸における伊藤博文の憲法調査―』、原書房、一九七四、所収)。

(4) 早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福

沢諭吉の書簡について」(『近代日本とアジア 年報・近代日本研究』山川出版社、一九八〇)、二七三頁。

- (5) 前掲、瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制』、一二〇・一二四頁。

- (6) 河島弘善『河島醇伝―日本勸業銀行初代総裁』(河島醇伝刊行会、一九八二)五三頁。

- (7) 前掲、瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制』、一二八頁。

- (8) 堀口修編著『明治立憲君主制とシュタイン講義―天皇、政府、議會をめぐる論議』(慈学社、二〇〇七)、二〇・二二頁。

- (9) 早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインと明治憲法の制定」(関西学院大学『商学論究』二七・一・二・三・四合併号、一九八〇)、六二七頁。

- (10) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「伊藤博文文書」書類の部、二〇九

- (11) 前掲、清水伸『明治憲法制定史(上)』、二四頁。

- (12) 明治十三(一八八〇)年三月十五日奥国公使館書記生に着任。

- (13) 明治十三(一八八〇)年三月八日奥国特命全権公使に着任、明治十四年七月二〇日仏国特命全権公使に転任。

- (14) 本間清雄の経歴については、佐藤孝「横浜人物小誌⑧ 明治初期一外交官の軌跡 本間清雄」(『横浜外交資料館館報』第一二号、横浜開港資料館、一九八五、八月号、六七

頁)に紹介されている。奥国日本公使館勤務のきっかけとなったのは、ウィーン万国博覧会頃と考えられる。左記にその史料を二点挙げておく。

国立国会図書館憲政資料室蔵「岩倉使節団文書」(リール一八、三一三コマ)

本間清雄儀昨壬申年博覧会事務掛リ被仰付候處其前ヨリ同人儀新紙幣増製造監督申渡置専ラ右事務勉勵罷仕候折即今度博覧会掛閑澤明清澳國へ到着別紙ノ通申越候處清雄儀ハ右御用勤兼候付テハ独乙國語ニ通候者無之候テハ博覧会速ニ運ヒ申問敷ト存候間右事務掛ノ儀ハ御一行中行ノ一名へ御下命有之候様致度候也

二月六日

鮫島 辨理公使

全権大副使閣下

国立国会図書館憲政資料室蔵「岩倉使節団文書」(リール一八、三一四コマ)

以書状啓上仕候然ハ本間清雄儀兼テ於當地博覧会事務掛被仰付有之筈ノ處同人儀目今紙幣製造御用取扱候由ニ付別紙ノ通申越候右ハ如何ノ行違ニ候哉於當方同人出張不致候テハ指向キ事務局用意方御用指支候間至急出張可致旨更ニ御申渡有之度此段及御引合候也

二月二日

関澤明清

鯨島 辨理公使殿

- (15) 明治十三(一八八〇)年五月二八日魯国特命全權公使に着任。スウェーデン、ノルウェーも兼任。
- (16) 明治十三(一八八〇)年五月二十二日着任。
- (17) 渡邊廉吉伝記刊行会『渡邊廉吉伝』、行人社、二〇〇四復刻。
- (18) 前掲『渡邊廉吉日記』、三〇四・三〇五頁。
- (19) 森川潤『明治期のドイツ留学生』(雄松堂、二〇〇八)にもウィーン大学学籍登録者リストが掲載されているが、そこに渡邊廉吉の名前はない。
- (20) 前掲『渡邊廉吉日記』、三〇八・三〇九頁。
- (21) 前掲『渡邊廉吉日記』、二五・二九頁。
- (22) 小林宏「解題 渡邊廉吉の人物素描―城泉太郎と比較して―」(小林宏、島善高、原田一明編『渡邊廉吉日記』行人社、二〇〇四、五〇二頁)では、シュタイン国家学を示唆することから、「渡邊の「奥国在留記」中の年代不明の記事は、シュタイン講義のメモと思われる」とされている。
- (23) 柴田隆行「ウィーン大学におけるシュタイン講義」(『東洋大学社会学部紀要』第四四・二号、二〇〇六)二九頁。
- (24) シュタインのこの年の講義は木曜日と金曜日が休みで、土曜日が「国民経済学」のみであることから判断する

と、最初の「九日」は水曜日である。順当に曜日を当てはめると、最初の月は三〇日までで、次の「二日」は金曜日となる。この曜日と日付が並ぶ月は、一八八一年の十一月、十二月である。

- (25) 前掲『渡邊廉吉日記』、三二五頁。

(26) 「井田讓履歴書」(国立国会図書館憲政資料室蔵「井田讓関係文書」)によれば、井田は明治十三(一八八〇)年三月八日に特命全權公使に任ぜられ、用向きのためしばらく東京に在任し、五月二十七日にウィーンに向けて出発している。

- (27) 前掲「井田讓履歴書」

(28) 仏国特命全權公使の鯨島尚信が明治十三(一八八〇)年十二月にパリで亡くなり、その後任として明治十四(一八八一)年七月二〇日に井田讓が任命された。明治十四年七月八日付伊藤博文宛井上馨書簡(伊藤博文関係文書研究会『伊藤博文関係文書』第一巻、塙書房、一九七三、一六三頁)には、「仏国え之公使は何とぞ井田を転任被仰付候様奉願候。御承知通り大山え之約も有之傍以右様奉願候。ヲウスタリアは代理公使は書記官え任し置候は、可然奉存候。」とある。

- (29) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九三頁。

(30) 佐藤元英「明治期における公使領事報告規則と通商貿易関係情報の編纂公刊について」(『外交史料館報』第三号、外務省外交史料館、一九九〇)に掲載されている在外

- 公使館員名簿によると、明治六（一八七三）年十二月三十一日現在、奥国（維也納）公使館に雇われている奥国人はバロン・シーボルトで、翌年の明治七（一八七四）年十二月三十一日現在では奥国人ガーゲルンに代わっている。ガーゲルンの任期は明治十年代まで続いているが、シュタインの前任者かどうかは不明である。ガーゲルンについては、前掲瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制—シュタイン国家学の軌跡』（二二一・二二四頁）に紹介がある。
- (31) 前掲、瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制—シュタイン国家学の軌跡』、一二五頁。
- (32) 前掲、瀧井一博『文明史のなかの明治憲法』、一二二頁。
- (33) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九五頁。
- (34) 渡欧中の伊藤と柳原については、前掲坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』九三・九四頁に詳しい。
- (35) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九三頁。
- (36) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九四頁。
- (37) 明治十五年二月十四日付、渡邊廉吉宛柳原前光書簡（前掲『渡邊廉吉日記』、三九五頁）
- (38) 慶應義塾大学『福沢諭吉書簡集』（第三集、岩波書店、二〇〇一）二二一・二二二頁。
- (39) 早島氏は先行研究において、シュタインが福沢の『時事小言』を「広くヨーロッパにおける政治学にも寄与し得る文献であること認めた」点に、この書簡の重要性がある

- と述べている。シュタインが目を通したのが、ジャパン・ウィークリー・メイルに掲載された「甚々簡短ナル抄訳」であることや、「政体学一般ノ為メノミナラス、広ク日本国ノ名声ヲ世界ニ発揚スルニ大切ナルハ、余カ信スル所ナリ」と述べ、欧州のいずれかの国の言語に翻訳することを薦めている点などからみて、当時、欧州における日本への関心が美術や文化的興味一辺倒であった状況の中で、日本から福沢の『時事小言』が発せられたことにより、異文化としての日本に目が向けられるばかりでなく、日本が一つの国家として欧州で認識される端緒となることを大いに期待するものであったと推察される。
- (40) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三集、二一〇・二一一頁。
- (41) 本間清雄については、佐藤孝「明治初期—外交官の軌跡 本間清雄」『横浜開港資料館館報』第十二号、一九八五、六七頁）に紹介がある。
- (42) 前掲『伊藤博文伝』中、二五二頁。
- (43) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「伊藤博文文書」書類の部、二〇九
- (44) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九六頁。
- (45) 明治十五年五月二十四日付、渡邊廉吉宛柳原前光書簡、前掲『渡邊廉吉日記』、三九七頁。
- (46) 明治十七（一八八四）年三月一七日に宮中に制度取調局が設置され、伊藤博文が長官に就任した。三月二十二日には制度取調局御用掛太政官権少書記官に渡邊廉吉が就い

ている。渡邊と伊藤の面識は伊藤の渡欧の際に始まるが、この時の縁故がのちの制度取調局の人事に影響を与えていると推察される。

- (47) 明治十五年六月二十六日付、渡邊廉吉宛柳原前光書簡、前掲『渡邊廉吉日記』、三九七頁。

- (48) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「井上馨関係文書」、明治十五年七月五日付、井上馨宛伊藤博文書簡

- (49) スロベニアのSteiermark州 Laško (ドイツ語ではTüffer) にシュタインが所有していた保養所が存在した。

- (50) 明治十五年八月十日付、本間清雄宛井田讓書簡、本間家所蔵「本間清雄宛書簡綴」、横浜開港資料館提供

- (51) 前掲『伊藤博文関係文書』第一卷、五四・五五頁。

- (52) 前掲『伊藤博文伝』中、二九六頁。

- (53) 前掲『伊藤博文関係文書』第一卷、一一四・一一五頁。

- (54) ドイツ語Steinは「石」の意味を持つ。

- (55) 前掲、坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』、九二頁。

- (56) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:A03022896700、公文別録・太政官・明治十五年・明治十八年・第一卷・明治十五・明治十六年(国立公文書館)、「澳国学士スタイン氏備入結約ヲ伊藤参議ニ委任并同氏年金給与ノ件」

- (57) 明治十五年八月十一日付、岩倉具視宛伊藤博文書簡、前掲『伊藤博文伝』中、二九四・二九九頁。

- (58) 伊藤が受けたシュタインの講義は伊東巳代治によって

筆記され、『斯丁氏講義筆記』として国立国会図書館憲政資料室所蔵「伊東巳代治関係文書」所収の他、清水伸『明治憲法制定史(上)——独逸における伊藤博文の憲法調査——(原書房、一九七二)にある。また、同じく伊東巳代治筆記の『純理釈話』も国立国会図書館憲政資料室所蔵「伊東巳代治関係文書」に収められている。

- (59) 前掲『伊藤博文傳』中、三三二・三三三頁。

- (60) 前掲、堀口修編著『明治立憲君主制とシュタイン講義』

- (61) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九八頁。

- (62) 明治十五(一八八二)年十一月十五日、伊藤博文宛ローレンツ・フォン・シュタイン書簡、(前掲『伊藤博文伝』中、三三二・三三三頁、所収)

- (63) 「シュタイン詣」およびシュタイン講義については、前掲、瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制——シュタイン国家学の軌跡——』や堀口修編著『明治立憲君主制とシュタイン講義』に詳しい。また、シュタインに宛てた日本人の書簡は萩原延壽氏によって発見されたのち、ドイツ連邦共和国シュレスビッヒ・ホルシュタイン州キールにある、州立図書館(Schleswig-Holsteinische Landesbibliothek)に『Der japanische Nachlass Lorenz von Steins (1815-1890)』として収められている。

- (64) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九九頁。

- (65) 北畠道龍とシュタインについては、平野武『明治憲法

制定とその周辺』(晃洋書房、二〇〇四)に詳しい。

(66) 前掲『渡邊廉吉日記』、三九五頁。

(67) 前掲『伊藤博文関係文書』第一卷、一一四・一一五頁。

(68) 明治十四年十二月十一日付、渡邊廉吉宛柳原前光書簡、前掲『渡邊廉吉日記』、三九四頁。

(69) 明治十四年十月十八日付、渡邊廉吉宛柳原前光書簡、前掲『渡邊廉吉日記』、三九三頁。

(70) 明治十五年五月二十四日付、渡邊廉吉宛柳原前光書簡、前掲『渡邊廉吉日記』、三九七頁。

(71) 前掲『伊藤博文関係文書』第一卷、五四・五五頁。

*本報告は、平成二十二年度お茶の水女子大学女性支援プログラム「学生海外調査」の援助を受け、ドイツ、オーストリアで行った史料調査の成果の一部である。この場を借りてお礼を申し上げたい。

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程)